

1.17から3.11へ

1995（平成7）年1月17日早朝、死者6,434人、負傷者43,792人という甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災が発生した。その震災から力を合わせて復興を遂げた神戸市は、東日本大震災発生直後から官民を挙げて東北の復旧・復興に力を尽くしている。そんな神戸の人々は、どんな思いから私たちに支援してくださっているのか受け止めよう。また、これから私たちが行うべき復興や支援の在り方も考えよう。



東日本大震災の被災地で活動をする神戸市の舞子高等学校の生徒たち

1 「幸せ運ぼう」に込められた、震災を風化させない神戸市の思い

神戸市では、1995（平成7）年の阪神・淡路大震災後、震災の中で得た教訓や体験をまとめた防災副読本小学校版「しあわせはこぼう」、中学校版「幸せ運ぼう」を作成し、神戸市内の小中学校の児童生徒が防災学習などにおいて活用するよう図ってきた。現在、小学校版「しあわせはこぼう」、中学校版「幸せ運ぼう」は、神戸市内の全ての小中学生に配付され、災害対策の仕組みや被災体験の理解、災害時の身の守り方の学習などに活用されている。震災を直接体験した児童生徒がいない現状を踏まえ、震災当時の状況を理解しやすい写真や、命の大切さを考えさせる作文の他、東日本大震災についても多く掲載している。



神戸市の防災副読本「幸せ運ぼう」

2 復興のシンボル曲「しあわせ 運べるように」

阪神・淡路大震災の直後に、神戸市内の小学校の先生が作詞・作曲した「しあわせ運べるように」は、神戸市民の希望の灯となり、今も市内の学校や追悼式典で大切に歌い継がれている。また、東日本大震災後は、歌詞の「神戸」の部分「ふるさと」に替えて歌われることがある。

しあわせ 運べるように

地震にも負けない 強い心を持って
亡くなった方々のぶんも 毎日を大切に生きてゆこう
傷ついた神戸を もとの姿にもどそう 支えあう心と 明日への 希望を胸に
響きわたれ ぼくたちの歌 生まれ変わる 神戸のまちに
届けたい 私たちの歌 しあわせ 運べるように 出典：「しあわせ 運べるように」

3 震災20周年 BE KOBE 神戸は人の中にある

2015（平成27）年1月17日、阪神・淡路大震災から20年が経過した神戸市では、復興の過程で、さまざまな社会課題解決のための市民活動や事業が行われてきた。また、震災の経験を活かし、多くの神戸市民が東日本大震災被災地をはじめ、日本各地、世界各地で支援を行ってきた。そして、震災20年を機に、震災からの思いを引き継いだ、神戸で生まれた震災の教訓や知恵を集め、多くの人に発信するプロジェクト「神戸からのメッセージ発信」を実施した。

プロジェクトの概要

- 思いを聞く…「震災を体験した人」と「震災を体験していない神戸市民」の皆さんへのアンケートの実施。
- 思いを語り合う…「震災20年を語ろう」と題して、「神戸の経験を、日本に、そして世界に伝えるために何が可能か？」をテーマにしたワークショップを開催。
- 思いを集めたウェブサイトを開発…震災以降さまざまな活動を行ってきた人々を紹介。また、アンケート、ワークショップで集めた皆さんの思いを掲載。



復興を誓う人々の互いのメッセージ

4 被災地どうしの輪 全国中学生防災サミット in KOBE

2014（平成26）年8月、神戸市は、これまでの自然災害により被害を受けた地域の中学生を神戸に招き、防災サミットを開催した。仙台市からも中学生が参加し、「仙台市児童生徒による故郷復興プロジェクト」の取り組みや、小中地域連携の取り組みについて発表し、全国の中学生と意見を交わした。そして、参加した中学生全員による行動宣言「結 2014 ～未来への決意～」を発表した。被災地の中学生がつながり合い、支え合う輪は、今も全国に広がっている。



防災サミットに参加した全国の中学生

【結 2014 ～未来への決意～】

- 1 私たちは、自分たちの地域についてさらに興味を深めます。 (地域の知恵をつなぐ)
- 2 私たちは、「まさか」に備え、常に危機感を持ち、そして災害時には強く生き抜きます。(災害時の教訓をつなぐ)
- 3 私たちは、笑顔と優しさあふれる地域づくりのために、行事を通して人と人とのつながりを大切にします。 (地域の人と人とをつなぐ)
- 4 私たちは、中学生にできることを考え、地域の方と共に未来の「まち」を描く担い手となります。 (未来へつなぐ)